

# 字音直読資料の長音表記の変遷

——音節構造との関係——

沼本 克明

## 一、序

江戸時代に将来された唐音では陰類韻が長音表記されている。それはなぜかが問題の発端である。

日本漢字音の系統には、古いものから順次呉音・漢音・新漢音・宋音・唐音の大きく五つがある。そしてこれらの各系統の漢字音を記載した資料が多数残されている。ここではそれらの内で、所謂直読資料を、中国語の仮名転写資料と規定し、その時代的変遷を手がかりにして、日本語の音節構造の究明を試みようとする。

現存する直読資料を時代順に列挙して比較してみると、それぞれの系統の漢字音が中国語自体の音韻変化を反映したことによる違いとは別に、種々の違いが認められる。この違いは、日本側の要因によって生じたものということになる。本稿では、その内の仮名転写に於ける長音表記と非長音表記という違いに注目して、日本語の音節構造の問題——即ちモーラ言語かシラビーム言語かに就いて、一つの解釈を与えてみようとするものである。

## 二、現代に於ける中国語の仮名転写

中国人留学生に簡単な中国語文を読んでもらい、それを日本人学生に片仮名で転写してもらった。同時に日本語のできる中国人にもそれを転写してもらった。その結果を以下に示してみる。(尚、この調査では特に何も転写の際の規定を設けず、自由に表記してもらった。)

(日本人学生の転写) (原表記のまま)

### A 学生

1. 我們来中国学习中文已经半年多了。  
ウオームン ライ チョングオ シュエシイ チョンウエンイー ジン パン ニェンドウオラ  
老師要求得很嚴格、我們也學習得很認真。  
ラオシ ャオ ショダ ゲン ヤン グ、 ウオームン イエシュエシイ ゲン イー シェン  
認真。

2. 我一天能走四十公里。  
ウオ イーティエンナン ツォースー シー コン リー

3. 中文不太難、発音比較容易、語法也不  
タイ アー ツァー  
太複雜。

4. 昨天星期日、天气很好。我和我愛人、  
ツォーティエンシー チー リー ティエンチイ ヘン ハオ ウオアーヘー ウオ アイレン  
孩子去香山公園玩了一天。  
ハイズ チイ ションサン コンエン ワン ラ イー ティエン

### B 学生

1. 我們来中国学习中文已经半年多了。  
ウオームン ライ チョングオ シュエシイ チョングアウエンイー ジン ハン ニェントウオラ

1. 老師要求得很嚴格、我們也學習得很認真。

2. 我一天能走四十公里。

3. 中文不太難、發音比較容易、語法也不太複雜。

4. 昨天星期日、天氣很好。我和我愛人、

孩子去香山公園玩了一天。

### C 学生

1. 我們來中國學習中文已經半年多了。

老師要求得很嚴格、我們也學習得很認真。

2. 我一天能走四十公里。

3. 中文不太難、發音比較容易、語法也不

太複雜。

4. 昨天星期日、天氣很好。我和我愛人、

孩子去香山公園玩了一天。

### D 学生

(中國人留學生的轉寫)

1. 我們來中國學習中文已經半年多了。老師要求得很嚴格、我們也學習得很認真。

2. 我一天能走四十公里。

3. 中文不太難、發音比較容易、語法也不

太複雜。

4. 昨天星期日、天氣很好。我和我愛人、

### E 学生

1. 我們來中國學習中文已經半年多了。

老師要求得很嚴格、我們也學習得很認真。

2. 我一天能走四十公里。

3. 中文不太難、發音比較容易、語法也不

太複雜。

4. 昨天星期日、天氣很好。我和我愛人、

### F 学生

1. 我們來中國學習中文已經半年多了。  
 老師要求得很嚴格，我們也學習得很認真。

2. 我一天能走四十公里。

3. 中文不太難，發音比較容易，語法也不  
 太複雜。

4. 昨天星期日，天氣很好。我和我愛人、  
 孩子去香山公園玩了一天。

扱、同じ中国語を仮名転写したものである、右記引例に明らかな様に、日本人と中国人の間には顕著な相違が見られる。勿論自由に表記してもらったものであるから、詳細に見ると個々に揺れがあるが、その揺れを越えて、長音表記か非長音表記か一現代日本語に於ける音韻論的立場に立つて言えば、一拍表記か二拍表記かという替えても良い一の点に於て両者には次の様な対立がある。(初出例を示す)

* 我也	* 格得	* 師多	習已	我		
イェ	カ	ダ	シー	ウオ	A	
イェ	グ	ダ	シー	ウオ	B	
イェ	カ	ダ	シー	ウオ	C	
イェ	グ	ド	ス	ド	イ	D
イェ	ゲ	ド	シ	ド	ウ	E
ヤ	ゴ	ド	ス	ド	ウ	F

(日本人)

(中国人)

* 了	* 去	* 子	和	氣	日	期	昨	雜	複	法	語	易	比	發	不	里	十	四	一
ラ	チ	ズ	ヘ	チ	リ	チ	ツ	ツ	ア	ア	イ	イ	ビ	ア	ア	リ	シ	ス	イ
ラ	チ	ズ	ヘ	チ	ル	チ	ツ	ツ	ア	ア	イ	イ	ビ	ア	ア	リ	シ	ス	イ
ラ	チ	ツ	ヘ	チ	リ	チ	ツ	ツ	ア	ア	イ	イ	ビ	ア	ア	リ	シ	ス	イ
ロ	チ	ツ	ハ	チ	ズ	チ	ツ	ツ	ア	ア	イ	ウ	ビ	ア	ア	リ	ス	ス	イ
ラ	チ	ズ	ホ	チ	ル	チ	ツ	ツ	ア	ア	イ	ウ	ビ	ア	ア	リ	シ	ス	イ
ロ	チ	ズ	ホ	チ	ロ	チ	ズ	ツ	ア	ア	イ	ウ	ビ	ア	ア	リ	ズ	ス	イ

長音表記

日本人の転写に長音表記がこのように顕著に出現するのは、日本語が音声に於ける長短を音韻論的に厳密に区別する言語であるからである。即ち日本語が拍言語(モーラ言語)であるからである。このことを逆に言えば、中国人の転写に長音表記が出現しないのは、中国語が一音節の音声上の長短を区別できない典型的なシラビーム言語であるからである。勿論中国語に於ても音声上には一音節の長短がある。その長短は四声によつて差があるが、しかしその差は微妙なものであつて、上記中国人の転写に出現する長音表記は四声による影響は認められない。むしろ当該部分が意味上の中心になる漢字で強く発音される場合に長音表記

されると言えそうである。

これに對して日本人学生の場合、原則的に全ての漢字が長音表記される。そして音的に短い輕声の漢字（\*印を加えた漢字）は長音表記にならない。日本語のモーラ言語性を良く物語っている。

この様に現代中国語をモーラ言語を使用する日本人が転写した場合には音声上長い（一拍でない）音節は必ず長音として表記されること、逆にシラビーム言語を母語とする場合には長短は音韻論的に曖昧であり、転写においても表記上の区別が出現しないこと、が確認されるのである。

### 三、字音直讀資料に於ける長音表記法の歴史

扱、以上は現代中国語音の仮名転写の実態を考察した訳であるが、過去に遡って日本人による中国語音の転写の実態を調査してみると、明瞭な時代的差異が認められるのである。この項ではその実態を、日本漢字音の系統別に紹介してみることにする。

#### A、吳音資料

吳音資料で管見に及んだものには、聖語藏本央掘魔羅經平安初期点（八〇〇頃）を始めとして、妙法蓮華經諸本、大般若經諸本、華嚴經諸本、金光明最勝王經、円覚經、仏說六字神咒王經、成唯識論、大雲輪請雨經、仁王般若經等の諸経が有る。これらの加點本の振り仮名を調査してみると、加點が声点のみのもの、或いは振り仮名が難讀字の部

分のみのものが有って、加點の稠密度という点からは区々であるが、長音表記という点から見ると、これら吳音資料に於ては、古いものから新しいものまで一貫して、表記上には原則として長音表記は出現しないのである。そういう全体的傾向を代表するものとして、加點の比較的稠密な例を紹介しておく。

（東大本大般若經建長頃点）（東京大学国語研究資料卷15より転載）

愴從兩足下千輪相各放六十百十俱股  
那頂多光從足十指兩腕兩眼兩膝兩  
脇兩膝兩脚兩股兩腕兩肘兩膝兩腕  
德字兩乳兩腋兩肩兩膊兩肘兩膝兩腕  
手兩掌十指兩脚兩腕兩膝兩腕兩膝兩腕

（慈海版法華經江戸時代刊）

如是我聞。時佛住王舍城耆闍崛山中與  
大比丘衆萬二千人俱皆是阿羅漢諸漏已  
盡無復煩惱逮得已利盡諸有結心得自在  
其名曰阿若憍陳如摩訶迦葉優樓頻伽  
葉伽耶迦葉那提迦葉舍利弗大目犍連摩  
尚、因みに付言しておけば、先に原則として長音表記が

出現しないと述べておいた様に、呉音直読資料に全く長音表記が出現しないのではないが、その出現率は極めて低い。

B. 漢音資料

次に、漢音直読資料としては、仏典として、孔雀經諸本、理趣經諸本、漢籍の蒙求諸本が有る。これら漢音直読資料に於ても原則として長音表記は出現しない。その実例を若干紹介しておく。

(東寺藏孔雀經院政時代点)

一切菩薩摩訶薩  
南無優曇鉢華開闢高  
我付敬禮如是等聖眾我今讀誦摩訶薩  
利佛母明王經我所求請願付如意所有一  
切諸天靈祇或居地上或處虛空或住於水  
異類鬼神所謂諸天及龍向摩羅摩羅摩羅  
摩羅摩羅摩羅摩羅摩羅摩羅摩羅摩羅摩羅

(龍谷大学本蒙求室町期点)

桓譚非識  
武仲不依  
伏波標柱  
秣陵初詩  
郝超舞參  
五珣短薄  
博望尋河  
田橫感歌  
士衡建多  
王商止訖

C. 新漢音資料

次に、新漢音資料としては、九方便、五悔、法華懺法、八名普蜜陀羅尼經、仏説阿弥陀經、戒品等有る。これら新漢音資料に於ても原則として長音表記は出現しない。その例を紹介しておく。

(東寺藏八名普蜜陀羅尼經觀應元年本奥書本)

今時世尊告金剛千菩薩言善男子汝  
所受持諸上明咒神用威猛切業難成  
雖後為益或初毀損今有八名普密神  
咒威德廣大事業易成神用秘密終  
無損能受持者必獲利益當為汝說汝

D. 宋音資料

宋音資料には、鎌倉初期に律宗僧泉涌寺開山俊杲(1166-1227)の伝えた系統、禪宗の臨濟宗僧の伝えた系統、同じく曹洞宗僧の伝えた系統があるが、この宋音に於ても原則として長音表記は出現しない。それぞれの代表的な例を紹介しておく。

(金光明懺法室町時代写・泉涌寺相伝宋音)

南無釋迦牟尼佛  
至心懺悔我比丘某甲  
命頂禮



F. 唐音資料

扱、以上に対して、江戸時代に中国語音が転写された唐音資料では大いに趣を異にし、ほぼ現代中国語の転写法と同様に長音表記が普通に出現するようになる。

但しこの唐音資料にも系統があり、その系統間で傾向が異なる。先ず黄檗宗唐音では次に『慈悲水懺法』（寛文版）の例を示した様に、長音表記はイ列音の例を除いて原則として出現していない。

（慈悲水懺法寛文版）

屬共住同止百一所需更相欺調或於鄉隣比近移  
 籬拓墻侵他地宅改標易相虜掠資財包占田園因  
 公託私奪人邸庶及以屯野如是等罪今悉懺悔又  
 復無始以來或攻城破色燒村壞柵偷賣良民誘他  
 奴婢或復柱壓無罪之人使其形殞血刃身被徒鎖  
 家緣破散骨肉生離分張異域生死隔絕如是等罪  
 無量無邊今悉懺悔又復無始以來至于今日或商  
 估博貨邸市易輕秤小斗減割尺寸盜竊分鉢期  
 滿圭合以蠶易奸以短換長欺巧百端希望毫利如  
 是等罪今悉懺悔又復無始以來至于今日案案

但しこの資料で重要なことは、その巻末の凡例で次の様に記述していることである。

「凡ッ傍音用ニ一字ヲ者、其ノ音ハ當ニ曳トシテ而呼レ  
 之ヲ勿レ類ニスルコト入一聲直ニシテ而促ニ與下世俗所ノ用

國一字ニ加テウノ字ヲ而呼フ之ヲ者、頗ル相イ類セリ 今マ不三繁ッ  
 逐一ニ下ウノ字ヲ（下略）」

この凡例によつて、この唐音系統の漢字音の転写者が一字仮名の実際の発音が長音であったと認識していたことが明らかである。その長音を「アウ」「ウウ」「エウ（稀）」「オウ」と一々表記するのは省略したというのである。「イ」の長音は、「ウ」で表記できないものと考えただらしく、「欺キイ」「比ピイ」「婢ピイ」「被ピイ」「期キイ」の如く頻りに長音表記が出現しているのである。（稀に出現する文献の長音表記にイ列音が多いのもこういう理由によるのかもしれない）。宋音資料等にはともかくこのような長音表記はないのである。

江戸時代黄檗宗系唐音資料は、この他にも『禪林課誦寛文二年（1662）版』『仏遺教經寛文二年刊』『妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第廿五天和三年刊』『仏説八十八名經（刊年未詳）』『三千仏名經（刊年未詳）』等があるが、これらの資料では次の例の様に長音表記が一般的である。

（法華經觀世音菩薩普門品第廿五天和三年刊）

妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五  
 爾時無量意菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛而  
 作是言世尊觀世音菩薩以何因緣名觀世音佛告  
 無量意菩薩善男子若有無量百千萬億衆生受諸  
 苦惱聞是觀世音菩薩一心稱名觀世音菩薩即時

次に、心越系唐音資料について見る。延宝七年（1679）来日した曹洞宗東臯禅师心越興偉の伝えた唐音で、それを記載した資料として琴譜数本が管見に及んだ。次に紹介するのは「東臯全集」所収本である。そこに明らかな様に長音表記が普通にみられるのである。

（琴譜）

扶桑操 照桑操 中秋前二日作。照ヒ天下無物不奉  
照ヒ日永照扶桑君聖臣賢来萬方澤風揚ヒ厚徳洋ヒ禮  
芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻  
芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻  
樂聲名久時書音長長物阜分廣貯廣積民安分多善多良  
句芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻  
山川萃秀分水色微茫京國生奇分樹影蒼蒼美具分人  
菊止芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻芭荻  
齊暢恍惚遊世義皇

この状況は、寺島良安「倭漢三才図会」（正徳二年刊）を初め、岡島冠山の諸著書等の訳官系唐音資料についても全く同様である。一例を示すと次の様である。

（唐音話解・享保元年刊）

知章乘馬似乘船	眼花落井水底眠
汝陽三斗始朝天	道逢麴車口添涎
恨不移封向酒泉	飲如長鯨吸百川
左相日興費萬錢	

（兩國訳通・享保頃刊）

通用話頭

讀書	○	看字	○	認字	○	寫字	○	不要忘記	○	學樣
照依	○	考字	○	莫差	○	不要煩	○	喧嘩	○	炒人
乘	○	纒好	○	輕輕講話	○	坐正	○	端正	○	敬歪

文雄「磨光韻鏡」は韻鏡窠子の右側に漢音、左側に吳音左下に唐音を加えた資料として知られているが、そこでも左に一部分引用した所から明らかな様に、唐音資料の長音表記が特徴的である。

（文雄磨光韻鏡延享元年1744刊）  
〔右側漢音―短音表記、左側吳音―短音表記、卒唐音―長音表記〕

内轉第四開

唇音				舌音			
清		濁		清		濁	
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○

諸本作開合不正換切韻指南及五音集韻散聲假聲喉齒唇六字集  
合韻七音略屬開也合韻等六字屬第五轉第四史音關若介



外轉第二十九開

横圖成齊齒呼其圖第二第唇音齒音與  
舌清濁音並舌內上呼其除成齊齒呼

唇	舌		音		聲	
	濁	清	濁	清	濁	清
幫	滂	敷	滂	敷	滂	敷
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂
滂	滂	滂	滂	滂	滂	滂

扱、以上の如く、江戸時代に入って中国語音を転写した資料に於ては長音表記が一般的になつてゐることが明かである。この長音表記の実態は、正に現代の日本人が中国語を転写するものと同じである。ということは即ち江戸時代の日本語が現代語と同じモーラ言語であつたことを物語ることになる。「江戸時代の唐音が中国語の陰類（無韻尾字）を長呼形で受け入れた」のはそういう日本側の音節構造が然らしめたためであつたと考えられる。

この考えを、江戸時代以前の転写に於ては長音表記が出現しないという事実の解釈に適用すれば、江戸時代以前の日本語は長短を音韻論的に区別できない言語（即ちシラビーム言語）であつたことになる。換言すれば、室町時代までの日本語は中国語と同じくシラビーム言語であつたために、その転写資料に於ては原則として長短が表記上区別されず全て一字仮名で出現したものであるということになる。

尚、言うまでも無い事乍ら、現代北京語では入声音は消滅しているが、ほぼ三百年前の唐音では入声音がまだ痕跡

的に残っており、それを、我が唐音資料では「作ヨ」「惑ホ」の様に仮名の右下又は真下に「。」を加えて示すもの（慈悲水懺法等）、仮名「ツ」で示すもの（観音経天和三年版等）、全く表記しないもの（琴譜、訳官系資料の全て）の様に方法は区々であるが、正確に書き分けている。即ち唐音の中国原音の入声が短促音節であつたことが日本側の資料によつて確定出来るし、また逆に当時の日本語が音節の長短を確かに厳密に音韻論的に区別するものであつたことが知られるのである。

所で、鎌倉時代に伝来した宋音に就いては、伝来時期の書写資料が実は一点も残っていない。宋音の記載された資料として最も古い確実なもの、金沢文庫本『正法眼蔵』弘安十年（1297）点、次いで『聚分韻略』（1306成）である。これらは転写資料そのものではないが、ともかく長音表記はなされていぬ。宋音による直読転写資料は、既に紹介したものの中『金光明懺法』が室町時代の写本で、他はいずれも江戸時代に版行されたもののみである。一方の生の中国語が長音表記されている、その同じ江戸時代に版行された（転写された）それら資料群に全く長音表記がなされていぬという事実は、その宋音の一字仮名が音韻的には長音ではなかつたことを物語っている。ということは日本語のシラビーム言語からモーラ言語への転回が、唐音が伝来した江戸時代に入つてからではなく江戸時代以前に既に完了してゐたことを物語っている。つまり、日本語がモーラ言語に移行するに伴い一字仮名表記の漢字音は全て室町時代以前に一拍として定着してしまつたと解釈できる。

扱、その宋音と唐音資料群には、声調表示（声点）が全く加えられていない。その理由に就いては、未だ決定的な理由付けがなされてはおらず、言わば謎のまま残されている問題と言えらるると思うのであるが、試みにその一つの解釈を提示するならば、以上述べたシラビーム言語からモーラ言語への転換が関係しているのではなからうか。上述した様に、鎌倉宋音が記述される様になったのは室町末期以後である。つまり時期的にはモーラ言語期に入ってからと考えられる。もともと、シラビーム全体に係る線の抑揚である中国語のアクセントが拍の相対的な高低関係によってアクセントを捉えるモーラ言語である日本語の側からは習得しにくいものであることは、現代に於ても経験されることである。宋音・唐音が記録されるようになった時期に至っては、かくして声調の習得を放棄してしまつたものではなからうか。（有坂秀世博士の紹介された宋音資料には声点が使用されていた事実が確認される。これは鎌倉以前のシラビーム言語期には、宋音も声調が識別され、記述されていたことを物語っている）。

#### 四、従来の説との関連

現代日本語の音節構造がモーラ構造であり、世界でも類例の少ない言語であることは衆知のところであるが、この

日本語の音節構造の歴史については、今日二つの対立する説が出てきている。

日本語が古くシラビーム言語であった可能性が柴田武氏「音韻」（『方言学概説』昭和三十七年）によって提示されてから、桜井茂治氏、遠藤邦基氏、柳田征司氏等によってその延長線上で論が深められて来た。近時、木田章義氏は「日本語の音節構造の歴史」（『漢語史の諸問題』昭和六十三年）を発表され、それらの諸説に詳細に再検討を加え結論的に「和語の音節構造は殆ど変化せず現在に至っているのではないか。」とされた。即ち、日本語（和語）は一貫してモーラ言語という音節構造を有していたものであつて、シラビーム言語と解される事象は、字音語（漢語）という知識音の世界で、和語の体系とは食い違つた音節構造を維持して来た為のものであるとされるのである。

ここに至つて、今日、日本語の音節構造が古くはシラビーム構造であつたとする説と、古くから一貫してモーラ言語であつたとする説とが明瞭に対立することになった。

扱、本稿で辿つて来た日本漢字音の転写資料に於ける長音表記の実態の解釈からは、室町時代以前と以後とではその音節構造の上で明瞭な違いが有つたと解釈せざるを得ないことになりそうである。即ち改めて現在対立している二つの説との関連に於て本稿の結論を述べれば、日本語は室町時代以前迄は中国語と同じシラビーム言語であり、その後「拍」という概念を持った所謂モーラ言語に変わったとする、古代日本語シラビーム説を支持することになる。

（ぬもと　かつあき、広島大学教授）

（平成三年十一月二十日受理）